本領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

大正十四年七月一日第三種郵便物認可
大正十四年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明　第七卷第十二號　（定價金拾錢）

大正十四年七月一日第三種郵便物認可
大正十四年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第七卷　第十二號

◉一口有難いと云はせて下さいませ。

◉一口有難いと云つて下さいませ。

◉次ぎから次ぎと「有難い」を傳へて下さい。

大日本眞宗
光明團本部發行

❖合掌宣言❖

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生きたまふみ親。罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひたまふ。

第三、惡まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の內に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生。

第五、『四海の信心の人は皆兄弟。』其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

❖念願❖

一。自信教人信。自分ばかりが喜んでゐないで緣のつながる隣人に、一味の法悅を分ちたい。

一。報謝。ご恩づくめの中に生きてゐることに感激して、身を粉にしてゞも報謝の生活が營みたい。

一。俗諦。無明の醉のさめぬに重ねて毒酒をすゝめぬやうに。教育勅語戊申詔書の聖旨にかなふ忠良な國民となりたい。

一。向上。一生の間、知識先輩のみ教に聞き、念佛三昧信仰生活の向上を計りたい

一。提携。外への戰ひの爲めでなくて、自身教化耕養のために、確乎たる團結提携を期したい。

お願ひ

一。どうか皆樣の御同情で同胞を紹介して下さい。雜誌の讀者を一人でも造つて下さい。

一。誰かに光明が見せたいと思つて下さる方があれば御厄介ですが、はがきに姓名と住所とを書いて送つて下さい。殘本を送ります。

一。雜誌代の出ない時は其旨を御通知下されば唯で差上げます。

年末に際して

□本部が廣島に移つてから三度年の暮を迎へました。佛大の加護と、同胞諸兄姉の熱烈なる御奮闘、御助力によつて年々に本圖の榮ゑを見るのは嬉しいことであります。

□一時的熱に浮かされて、騒ぐ人は多いけれども、静かに求道の旅を續けて深く眞の自覺に入る人は少いのであります。年の暮に當つて、今一度静かに自分に立ちかへつて、深い内省に入りませう。やがて來る新春は、生命の不退の精進を續ける人にむかつてのみ意義のあることであります。

□一年を回顧する時、泣いた日もありませう。腹立つた日もありませう。幾度か後悔の種も播いたことであります。されど、静かに念佛して、新らしい心でやがて來る元旦を迎へませう。

□年の暮に當つて、奮闘して來た一ケ年を懐しい心で振返つて見た時、そゝろ感謝の念に打たれます。眼をとぢて、静かにみ名をよべば、各地にゐます親しい皆様のお顔が順々と浮びます。さうして至らなかつた數々を心からわびしたい心が湧いて來ます。

□私どもには殘された澤山の仕事があります。幸に本部員一同達者で、理想に向つて、突進致したいと存じてゐます。どうか皆様の一層の奮勵をお願ひ致します。

□幾度か難局に出遇ひながらも、茲に多大の光明を本圖の將來に認めて、光輝ある大正十五年の新春を迎へんとすることは幾度考へても感謝の外はありませぬ。合掌。南無阿彌陀佛。

彼女の聞法三十年。しかし彼女には何物もない。
聞くだけが賢いのなら、浪速節道樂の男が一生を寄席に通ふて何ほど賢くなつたか。
一生を聞法に使ふてしかも何物もない。何處に欠陥があつたか。彼女はたゞ我を忘れて話を聞いたのだ。
我を知らずして話を聞けば、話は話におはる。
話を聞く者は多く、道を求める者は少ない。
道を求めて三十年を費すか。話を聞いて三十年を送るか。
往生極樂の話は甘く、往生極樂の道は易くして辛し。

生命としての信仰

住岡狂風

生命

この光明は大學生も讀めば、下女下男の中にも讀者がある。わからぬ方のためを思ふて、『生命』の二字から説明にかゝる。

私は毎日水を飲む。水をとらねば死んでしまふ。さうした場合に『水は我等の生命です。』といふ。然り水がなくては死ぬるが故に水を飲む。斷じて用意のために水を飲んだり復習のためには水をのまぬ。

一人の學生がゐる。彼は常に優等生である。而して彼は、他の學生よりも早

く起き、遲く寢て勉學する。彼が常に優等生たるは、彼の勉强努力の賜である。彼は常に『勉强努力は私の生命です』といふ。

家が貧しいのに澤山の家内がある。彼は彼の勞働によつて家族を養つてゐる一日彼が病氣になれば、家族は一日飢ねばならぬ。一家を支へるものは唯彼の健康である。さういふ場合には、『彼の生命は健康である。』といひ得る。

もつと進めて云へば、生命とは『いのち』である。これなくしては生きてゐるといふことを考へられない力それが生命である。

親鸞と南無阿彌陀佛

ブエートーブエンの生命は音樂であつた。

吉田松陰の生命は國家であつた。

乃木大將の生命は明治大帝であつた。

しかし、これはよい例である。

なくてならぬものが生命であり得るならば、泥棒は石川五衛門の生命であり『寢返り道德』は支那政治家の生命であるかも知れぬ。

さうです。人が人であるためには、よしそれが、七十八十の名もなき人生の敗殘者に見ゐる老婆であらうとも生きてゐるためには何等かの生命がある。

彼が遂に人生の全てに敗れても、彼の血の一滴がある間、彼の顏の何處にか笑顏が見える間、彼には、其處に何等かの生命が流れつゝあらねばならぬ。

南無阿彌陀佛は親鸞の生命である。

如何に聖人に美しいところがあつても、彼から念佛をはなしては考へられな

い。其一言も其一行も、それは遂に南無阿彌陀佛をはなれては考へられない。

南無阿彌陀佛が彼になり、彼が南無阿彌陀佛になつたのである。彼自身の中心生命こそ南無阿彌陀佛であつたのだ。

『敎行信證』一部六卷こそは、實に聖人の唯一絕對の生命たる南無阿彌陀佛を体驗せる生命の書である。彼の絕對無雜の信心を大膽に披瀝せる、感恩の血の記錄である。敎行信證は遂に念佛の書である。廻向せられた生命たる南無の六字をはなれては遂に何者もないのである。

幽靈

幽靈。小暗い木陰に青白い恨しさうな顏をしてフラ〳〵と流れ動く者、彼は幽靈である。彼には足がない。然り幽靈には足がない。

『恨めしい！』

それは幽靈の全体である。私は世の所謂幽靈を見たことがない。けれども人生の惡戰苦鬪につかれ、人に欺かれ、世の荒波に吹流され、其尊き一生が將にこの『恨めしい！』の一語で終らふとする幽靈を至る所に見る。

幽靈には足がない。風のまに〳〵流れ動く者は幽靈である。私は世の所謂幽靈を見たことがない。けれども白晝、至る所に歩む足なき幽靈を見る。大地の上をしつかと歩まざる幽靈を見る。

權威者の如く立つて『地獄も極樂も天國もないぞ。死は死滅である。火の消ゐたのと同じことだぞ。』と叫ぶ者があると、幽靈たる彼等はフラ〳〵とそれに動かされて『それもそうだ』といふ。

權威者の如く立つて『地獄も極樂もあるぞ。今にして死の覺悟をせよ。永遠の生命を得る道に入れ。』と叫ぶ者があると幽靈たる彼等はフラ〳〵とそれに動かされて『それもそうだ』といふ。

彼等は何故に風のまに〳〵動くか。彼等は『彼自身の中心生命』を知らぬからである。

解

理論を聞くと皆わかる。道徳の話でも宗教の理論でもそれを頭で理解し、其要領をつかむことなら誰にでも出來る。

解といふのは頭で道理が知れることである。頭で判斷して間違ひだと思ふことを信じられるものではない。理論的にわからねば何處までも研究するがよい

間違ひのない理論、智的滿足をしてゐくことは其人に正しい道を示す第一歩である。正しい智の滿足を得ない信、云ひかへると解のともなはぬ信は盲信である。盲信は正信でないから、遂にほんとの力とはなつてくれない。

行

人は頭で知つてそれだけで滿足が出來るものではない。私どもの魂はもつとそれが私どもの本質的根本的な心の流れに、それを見出さうとする。

行といふのは、信仰が單に頭の問題でなくて情意の問題となることである。頭ではよくわかつて來ましたが、どうも信じられませんと云ふのはそれは、情意の問題とならぬといふことである。

頭でわかつたとは概念として知つたといふことである。概念を知つたことに

力はない。

血と涙との洗禮を受けた時、云ひかへれば、現實の我が胸を通して問題が問題とされた時、それを行といふのである。

頭で知るのは容易い。されど、それが我が生命となるには、其處に血みどろの精進が續けられねばならぬ。忠義をせよとの理窟は簡單である。けれどもそれを情意の問題として、大和魂の願力を我がものとすることは困難である。

困難であつても、情意の問題とならねば、それが生命となつたのではない。我が生命とするためには、精進の一道を突進せねばならぬ。

向

人は社會的動物である。一人の問題は一切人の問題である。私どもが、何かを得た時、自分一人のものとして封じておくことは出來ない。自らが信じた時にはそれを他に傳へやうとする。

成道の釋尊は、彼御一人のうちに、一切衆生を發見したまふた。一切衆生はそのまゝ一衆生である。一衆生の問題は、一切衆生の問題である。自己の道の明かになつた過去の聖者たちには必ず其處に宣傳が伴つた。

自己一人を通して一切衆生を見、一切衆生によつて自己を見ることが出來るやうになつた時、一切衆生と我とをきりはなして考へることは出來なくなる。さうした時、自己の情意は他人を憐の情をもつてながめ、それに働きかけやうとする。其はたらきを『向』といふ。

自分は自分だけで閉いてゐさへすればいゝのだ。その態度は所謂聲聞の個人

的利己的態度であつて、自利利他の菩薩の大道ではない。沈默、獨善、五十年ピラミツトの如く立てるものが偉大であるならば、人生には遂に何等の進展も興味もあり得ない。

さりながら、向から行は出て來ない。世には自己に何等持たぬものが、人に賣らふとする者がある。それは安價なる解決に腰をおろせるものか、世を名聞利養のために僞く者である。

解、行、向、それは三つのまゝが正しい信の內容である。

大理想

『恨めしい！』

それは幽靈の全體である。人は何が故に幽靈となるか。何が故に恨しい心をかゝにて風のまに〳〵動かねばならぬか。恨めしいとは希望を見失ふた者の絕望の聲である。前途に何等の光明をも見出すことが出來ないで、暗黑なる過去の囚となつた者の聲である。

然り幽靈には、希望がない。理想がない。見よ其心中に一縷の光がなげられ其前途に希望の大光明が揭げられた時、人は絕望から蘇るのである。

幽靈も過去には希望もあり理想もあつたのだ。それが、希望はとり去られ光明は消え、理想は打壞れて遂に『恨めしい』の二語だけ殘された痛ましい幽靈となつたのである。

人間といふ幽靈の前に、久遠の大理想が揭げられてある。はつきり云つてたく。

一切衆生悉く成佛することが出來る。

確信を與へるために、必ず如來たることが出來ると云つてゐく。誠に『一切衆生悉有佛性』の釋尊の叫びこそ、一切衆生に對する大理想の掲示である。實に、この『一切衆生悉く佛性あり。』と聞いた時、我等の心は躍りあがるのである。

三種の危險

雜誌希望の中に、パスカルの言葉がひいてある。それを借りて來てペンを進める。

第一『人間にその偉大なることを示さずして、彼が如何に禽獸に近いかとゆふことを餘り多く知らしめることは危險である。

第二『又其卑陋なる點を示さずに、餘りに多くその偉大さを知らしめることも危險である。』

第三『彼をして、此の何れをも知らしめずに置くことは更に危險である。』

この三ヶ條を其のまゝ宗教壇上へ持ち來つて味はふて見る。これを云ひかへると

第一『人間に、佛になれるのだといふ偉大さを示さずに、人間が如何に動物に近い盲目的本能的欲望によつて動いてゐる淺間しいものであるかを知らせすぎることは危險である。』

第二『しかし其卑陋、汚惡なる點をば示さずに、唯、佛になれるのだ。佛性があるぞとだけ、知らせることは危險なことである。』

第三『けれども佛となれることも、罪惡の凡夫であることも知らしめないのは一層危險なことである。』

かう味つた上で目を一轉して社會の上を見渡して行かふ。

最大なる危險

此處に牛馬に近い人間がゐる。彼は自分のほんとうの相を見つめたことがない。又自分の全部を知らしてくれる教養をも受けたことがない。それが最大なる危險である。牛馬に近い人ほどそれが甚しい。惡を惡と知る心がない。善を善として求める心がない。畜生と同じ暗い〳〵本能を持つことを知らない。毎日〳〵惡魔の軍勢にせきたてられて、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒に、毒せられてゐることを知らない。それと同時に、目が天上高く光の世界をにらむことを知らない。彼も亦一念發起して、精進努力の一道をたどれば、彼の一生が至極の寶玉となることを知らない。彼が墮落の深淵に沈み果てるのは、彼の高き一面と、彼の低き一面とを知らぬ故である。彼には、修養もない求道もない、宗教もない道德もない。世間全体を此目で見る。社會の大部分の人が此の眠れる姿で、危險なる斷崖にむかつて流れつゝある。人のことだと云つてはゐられぬ。彼等は、地獄を知らず、淨土を信せず、惡魔を見ず、佛を見ず、因果を信せず眞理に叛逆して、遂に本能を其のまゝに肯定して危險なる深淵に沈みつゝある

自惚

卑しい汚い點を知らしめずして、餘りに偉大なる方面を知らせることは次ぎなる危險である。

人は誰一人として自分を低く見たいものはない。自分を善いと見、賢いと見たいのは根本的なる我執である。されば褒められて氣持の惡い者は一人もなく缺點欠點を直ちに誠められた時、誰も皆失望し、落膽し、時には腹さへ立てる自分を高く賣りたい。自分を大きく評價したい。さうした久遠の執れを有するものに、重ねて彼が偉大であることをのみ知らせることは極めて危險である。

足が地についてゐることを忘れて天上にのみ目をそゝぐ者の足下は千丈の奈落である。

夫婦喧嘩がたゑず、父母に孝道はつくさず、村民からは毛虫のやうに嫌はれ酒癖は惡く、惡徒の親分になつて、まだ天下一の賢者の如く自惚れた男。それが專門學校の卒業生である。

何等の修養もせず、世間並の生活をつゞけてゐる者が二三冊の佛書を讀み、佛性の二文字に氣づき、自分にも佛性があるのだと、悟つたやうに思つてゐる者がある。識者の一笑にも價しない。

世に世間からおだてられて天晴れ聖者を氣取るお目出度い人がある。自分の赤裸々な姿にさめずして天使をもつて自ら任ずる。彼が偉大さを知れば知るだけ危險である。彼の裏から生きた力が動く時、僞善の二文字に氣づく時、彼は人格の破產をせねばならぬ。

弊惡

人間に其偉大さを知らしめないで、動物に近いといふことのみ知らすことは危險である。

馬鹿だ、馬鹿だと、叱るばかりで大きくすれば、天性立派な子供でも馬鹿になる。

年老ひた田舍の同行が『私のやうなつまらぬ者はとても信仰させて頂くことは出來ませぬ。』と自らを殺してゐる者がある。立ちあがることの出來ぬ人間苦に度々打ちのめされた者が遂に生きながら世を悲觀すると幽靈となる。

動物と一緒に養へば、人も亦動物になる。動物に近い人間と共に居れば、人も亦動物のやうな人間になる。動物的な汚さだけをひき出すことは、救ふべからざる奈落に人をひき下す。花柳の巷に身を亡ぼす娼妓に、貞操の觀念なく虚僞欺僞を平氣で行ふ賭博仲間には、信實の言葉は藥にしたくもない。娼妓にむかつて人間の本能の丸出の話を持出し、貞操を守るものゝない話を聞かせ、賭博の徒輩に人間に眞實のない話を聞かせば、これにまさる危險はまたとあり得ない。

ほんとの道

『彼に前者と後者と共に示すことが正しい。』（パスカル）

神佛としての人間、動物としての人間、人間性には此の二つが存在する。動物的な本能生活からのがれることも出來ないやうに、無限に、この汚さから脱しやうとする願求がある。誠に神のあるところ其處には惡魔が巣喰ふてゐる。善には惡がからみ、光には暗がともなふてゐるのが地上である。

地上に於いて、この二つの對立について眞に深刻に知りつくしたものは親鸞である。

古からの聖者は、人間の中に流るゝ動物的の血とあまりにも戰つた。さうしてさうした罪濁をきらふて、光を憬れるの結果、ともすれば、暗い一面をあまりにも出さず、肉食せず妻帶せず、靜かに罪惡の巷を離れて、林間、堂廊に陰遁して其の淸き一面を後光の如く輝かして世を去つた。偉大は偉大であるけれどもあまりにも人間性を知りつくした我等は無限の寂しさを味はざるを得ない

誠に人は一度は必ず聖道の行者である。されど見よ。我が心中には、無限の煩惱の賊が其猛威をふるうてゐるではないか。追へども追へども群り集る惡魔の軍勢が一寸の隙もなく我が心中を荒す。されど一面この惡魔、煩惱の軍勢を我が心の主としておくことも出來ぬ心が動いてゐる。煩惱をはらひのけて進む願生の心と、それに反對して行かふとする根强い宿業の力、この佛心と、この衆生心、善心と惡心とが共に結びつき、戰ひあつて離れて呉れない所に我があるのであつた。衆生心は地獄よりはひ出でた心であり、佛心は、光の世界から來れる力である。我とは、遂ひに永遠の戰場であるのか。

若し惡魔の軍勢が勝つならば、我は遂に永遠の地獄である。と云つて我が力で、此の煩惱のすさまじい勢をどうすることも出來ぬ。此處に人間としての行詰りがある。こゝに佛にもなりきれず、惡魔にもなりきれぬ我が見出せる。

煩惱生活から目覺めないまゝ、極端に云へば、惡魔の心のみが心中に滿ちてそれを問題にしない間こそ、平氣でもあらふ。人格の破產に氣もつくまい。何の矛盾もあるまい。何の悶えもあるまい。惱みもあるまい。覺め行く時でないと、惡魔が釋尊の成道をさまたげた風光は讃めない。誠に、久遠の生命たる如

來の み心に覺める時、心靈の東天に光が輝きそめる時、必ず惡魔は其立場を失ふまいと、彼の必死の大軍勢をくり出してそれをさまたげやうとかゝるのだ。私どもは禽獸に近いといふことを知らされた。されどそれでよいのだとは知らされなかつた。いゝわ〳〵心の奥底から朗々と叫ぶみ聲は、動物に近くてもよいとは斷じて云はなかつた。

菩提心と衆生心とが無限の爭鬪を續ける、其處に親鸞の見たはつきりとした世界がある。『定水をこらすと雖識浪しきりに動き、心月を觀ずと雖、妄雲なほたほふ。然るに一息つがざれば千載ながくゆく。』かうした心内の有樣を我がほんとの事實として見たものは決して善心や佛心が見ねるものではない。唯見る。心中隈なく占領してゐる者は煩惱、惡魔の軍勢のみである。善導の『罪惡生死の凡夫』たる痛ましい叫びが、自已を僞はらぬ者の心から叫ばれる。果しなき生死の苦海が行手に擴つてゐる。

本願の宗教

我といふものゝ正体がはつきりと知られて來た。動物にもなれず、佛にもなれないところに我が存在したのである。こゝに聖道門にとゞまつて、此土入證と、さとりすますことも出來ず、さりとて、この願心を棄てることも出來ぬ。本願の宗教は此處から生れたのである。

斷ちきることの出來ない業苦に縛られて、無明の廣海に沒在して行く其下には、それを限りなく救はんとする力が動いてゐた。

その救はんとする力は一体何か。その力を我と見たが故に、こゝに無限の爭

闘を見ねばならなかつたのだ。

實に、親鸞は、眞實の救ひのみ聲を、このはてしなき戰ひの中へ聞いたのであつた。如來は沈める我を救はんとして、絶對に我をはからはせたまふてあつたのだ。『罪はいかほど深くとも、我を一心にたのまん衆生をばかならず救ふ。』の勅命は、狂亂怒濤の心海に雄々しくも響いたのであつた。『たのめ救ふ。』『一念の信心』『信せよ、まかせよ、たのめよ。』言葉は變つても、彼の願力が衆生の魂に、どん底に体驗された時、それが即ち信心であつた。信心こそ、それはそのまゝ如來にてましました。彼の絶對無條件の救濟が、体驗された姿こそ、信心であつた。たのめも、まかせも、すがれも、願力に乘れも、それは決して救ひの條件ではなかつた。さうして、念佛こそ、如來の唯一の顯現であり、表象であつた。

罪惡生死の我が、そのまゝかの願力に乘せられてある世界には、爭闘はなかつたのだ。唯、感謝と懺悔のみがあるのであつた。

嚴粛なる事實として、惱める衆生の心に佛の大慈大悲が味はれた時、死せる過去は蘇つて、彼の願力に活かされてあつたことがわかる。一切の善惡を貫いて、脈々として躍動する純一なる生命が、我の全部を活かしきつて進む。其處には、最早幽靈は存在しないのである。

功利的信仰

『死んでおちて行かねばならぬ地獄がおそろしい。その地獄をのがれて、お淨土へ參るのにはどうしたらいゝか。自力では行けない。だからお他力でな

けねばならぬ。どうすればお他力で、極樂へ參いらせて貰へるか。』

大部分のお同行が此處から出發する。出發はそれでいゝ。しかし何時までもそれにとゞまつてはならぬ。若し、どうしたら地獄をのがれて淨土へ行かれるかといふ心のまへには、ご信心さへ頂いたらよい。といふ答へが與へられるさうした場合の信心はそれは地獄から極樂への轉換のために、信心は條件になつてしまふ。信心が條件に見ゆる間は、それは功利的に信仰が取扱はれてゐるので、生命としての信仰ではない。生命としての信仰の前には、信心は條件ではなくて、信心それ自体が信仰であつて、信仰によつて何か外に、『ものにしやう、』といふ野心はない。ものにしやうとする卑しいさもしい心のある間、それは斷じて眞の法悅や、大安心の境地があるものではない。功利的信仰であるならば、今日一日信仰がなくても生きて行けやう。されど、生命としての信仰はこれを無くした時は、我といふものゝ存在さへ疑はねばならなくなる。

『どうしたら極樂へゆけるか。』其處から出發してもいゝ。しかし、單にそれに止まつてゐる間は、まだ眞の宗教圈内に入らないのである。生死を一呼吸の間に見つめ、今の罪惡の我を抱いて、永遠の巖頭に立つ時、其處に眞の信仰は生れて來るのである。

信心を極樂への切符ご心得て、ある者の信心を定散自力の信心といふ。父母を父母と信じてたのみにする心、素純に孝道を守る子の信順の心は決して、それが親子をつないで、親子たらしめる條件でも切符でもない。親の慈愛こそ親子を親子たらしめた唯一の力である。其慈愛を子心の上に体驗された時、子の

信の心は生れたのである。

如來が、衆生の上に働きたまふて、其大慈悲心が、衆生心を攝取した時、衆生にあつては、信心といひ、如來にあつては、願力といふ。信心は衆生によつて味はれたる佛心である。佛心と凡心との融合こそ信心である。かうした自力をはなれた信心には、『涅槃の眞因は唯信心をもつてす。』といふ絶對の德と力とが備つてゐるのである。さうした信念こそは衆生の生命であつて我より、これをひきはなすことを得ないのである。

何時までも、地獄と極樂と信心と、三つをならべてながめねばならぬ信仰者も亦、幽靈である。この幽靈信心のことを若存若亡といふ。若しは存するがごとく、若しは亡きが如し。幽靈の風にまに〳〵柳の木かげに、若しはあるがごとく、若しは亡きがごとく、もの哀れなるさまに似てゐる。

生命としての信仰でなく、功利的信仰者に、『それでは違ふ』と云へば、ヒョロつき、『それでいゝ』と問けば、それをたのみ終に、他人によつて動き、善惡によつて動搖し、敎から敎に迷ひ、云葉から云葉に飛び、終に幽靈でおはるのである。

人間の獨立性と信仰

長い間絶對他力の信仰が、人間の獨立性を損ふものと思はれて來た。それは敎義の罪でも親鸞の罪でもなくて、不徹底なる說敎者と、功利的信仰者の罪であり、他力眞宗を知らざる門外漢の無智の罪であつた。他力思想が人を横着にするとはそれはあやまられた批評である。

□他力とは恩の感得である。

恩は東洋思想の根源である。人にゆるされたる至高の情操であつて、人の眞情の發露であり、生活の更正であり、感謝生活の根源であつて、人を横着者にする微塵の要素をふくまぬ。否、死せる人に、眞に生きる法悦の泉を與へて、活ける人格を生むのである。

□他力とは、迷ひの我が打くだかれて如來によつて立つことである。

如來は智慧と慈悲とである。如來によつて立つとは、智慧に動かされ慈悲に救はれて、大安心のまゝに、不退の精進に入ることである。如來の願力は自然である。自然は金剛である。必然である。この必然の力によつて、立つのである。

□他力とは、お隣の金庫の金をあてにして、安價なる墮眠をむさぼることではない。

他力の一ぱん大きなはきちがへはこゝにある。

乃木大將が赫々たる名をなして、大和民族の神として祭られたといふことは彼が眞に　明治大帝によつて生き、大和魂の願力？に乘托して生きたからである。彼は感恩の人である。眞に他力によつて、自ら生きた人である。明治大帝と大和魂とを、彼から取去つた時、彼は一個の人形でしかないのだ。彼は旦にも、陛下を念ひ、夕べにも國家を念ひ、一生を君國の間に捧げて、東奔西走、私有の乃木でなくて、公有の乃木であつた。此處に、眞の他力がある。旦にも陛下を念ひ、夕べにも國家を念ふ。旦にも如來を念ひ、夕べにも、佛を念ふ。

念佛こそ眞の他力である。

□如來の願心が煩惱の唯中にひたぐと感じられて、我等の信心となる。信心が外部に表現せられて稱名念佛となる。念佛とは如來の上に我を見出し念々に如來にはぐくまれて生きることである。それは斷じて獨立を奪はれるのではなくて、永遠の獨立こそ惠まれるのである。

□他力とは自力とならぶべきものではなくて、自力敎の究極が他力敎である自力で覺が開けたとか、我はこのまゝで如來であるとかいふことは、眞に我の正体をつきとめずいゝ加減なところで、求道心がにぶつたのである。自力敎でとゞまるといふことは、嚴肅なる人生の事實を忠實に見ざる不徹底なる求道者の一時的腰掛である。美しいと豫想された我が打壞される日があることを知らないのである。業力の根强さに目覺めた者は、其處に願力の不思議に救はれて全ての自力敎が他力敎に入るべき過程であつたことが知られて來る。

□他力だと云つても、寢てゐることではなくて、此足が歩み、此の耳が聞き此の目が見、此の手が拜み、此の口が稱へ、此心が思念し、此心が信じ、此の心が感ずるのである。これこそ眞の他力絶對他力であつて、寢てゐる間に、石が蓮でおされるやうにして淨土に行くのだと思ふ考は相對の他力であつて、平面的な淺薄な見方である。願力に乘ずるとか、如來に救はれるとか云ふことは、私の目も耳も口も手も足も、身、口、意の全てが如來に占領されて、佛心によつて動かされることである。和讃に聖人は「阿

彌陀如來の三業は、念佛行者の三業と、彼此金剛の心なれば、定聚のくらゐにさだまりぬ。『三業とは、身と、口と、意の三業のことである。凡夫の三業の上にたのむ形を表はして、その上に如來の三業が表はれて來るのではない。如來の三業が衆生の上に顯現れて、衆生の三業となるのである。如來心そのものが、衆生の全てに表はれて、衆生が如來を莊嚴してゆくのである。これが、眞の他力で、人間の獨立性をそこなふものではないのである。

偉大なる未來

幽靈とは迷ふてゐる者である。死の國をさすらふものである。力のない者であり、光をもたぬものである。唯彼は彼の恨めしき過古を有するのみで、偉大なる未來を持たぬ。暗き過古と、灰色なる現實を有するのみで、光り輝く明日を持たぬ。

人間といふ多くの幽靈が、偉大なる未來を有せず、囚はれの今日を、齷齪と蠢動して、彼の偉大なる半面と、悲しき半面とを知らずして暮す。彼等は幽靈なるが故に、頭のみを有して足を持たぬ。頭の世界のみ働かして、足を働かせぬ。如何にして、働かずして多くの金錢を得やうか。名譽を得やうかと文明人と稱する幽靈が、頭のみ働かして、時勢の風のまに〳〵、金を追ふてさまよふ。彼等は遂に、偉大なる未來を有せぬが故に、尊重すべき今日をも持たぬ。

念佛行者は、久遠の生命をふき込まれて、智目行足を授けられて白道の上を

光の彼方に歩む。彼の前には偉大なる未來があり、必定の菩薩てふ尊重すべき現實がある。

心靈の故郷

家のない子。親のない子。思つただけでも寂しくなる。かへりゆく家郷のない者ほど寂しい姿はない。

私は永劫流轉の衆生たる我に目覺めて其寂しさに戰慄した。されど衆生を生む者は如來であつた。

誠に現實我を救ふものは、彼の願力であつた。されど、白道の彼方に立ちて我をよびたまふは、盡十方無碍光如來にてましました。我々は我々の現實に執着するのあまり、彼の久遠の大理想たる如來を信ずることが出來なかつたのである。されど、彼岸の大理想こそ眞に實在するものであり、現實の流動せる我は苦であり、無常であり、無我であり、空であつたのだ。眞我にてまします大我にてましまし、常住にてましますものこそ彼の岸の如來であつた。彼岸の光に照されてこそ、其處に衆生たる自覺は生れたのである。

かへりゆく久遠の親里こそ、彼の世界であつた。しかも我は今、其の歸りゆく道をこそ急いでゐるのである。召されてかへる日を念ふ時、彼の生活は輝いてゐる。誰か彼の本國慈母のもとにかへるを思ふて稽ひたゝぬものがあらふか

『久遠劫よりいまゝで流轉せる苦惱の娑婆はすてがたく、未だうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりおしくはおもへども娑婆の緣つきて、ちからなくてをはるとき

かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろのなきものを、ことにあはれみたまふなり。』との聖人の悲歎は、永遠の故郷にかへりゆく者の、棄てがたき執着を悲しみつゝも、いよ〳〵大悲にむせぶ、機の深信である。

我から彼方に呼びかけるのでなくて、如來こそ、『汝よ』とよびたまふてあつた。如來に汝よと呼ばれたが故に、我は如來の一人子であつた。如來によつて『汝一心正念にして直ちに來れ。我能く汝を護る』と呼ばれることに氣づくとき、我は眞に偉大なる公有の我として生き得るのである。

『信ずる者の幸福よ。信は至誠の心なり。靜かにみ名をおもふ時。如來は我にありたまふ。』

とは我が第七圖歌歡喜の末節である。

說法人と聞法人

龍谷大學　藤原三千丸

一、聞法人の二難關

何かの問題に當面する時、我々がそれを解決し樣とするならば二ッの方法より他にはない。一ッは自分で考へる事であり、他は誰かに相談を持ちかけて、教示を受ける事である。暫く前者を自力と言へば後者を他力と言へるであらう表面上は自分で考へることは他に教示を求めることよりも數等困難な樣に思へる。そして他の力を借りることは誰にだつて出來さうに思へるのであるが、實

際は此れも普通には出來ないことだ。

佛釋迦樣が舍衛國祇樹給孤獨園に在した時、或日諸弟子に向つて斯く說法なされた。

『次の二種の人が世に生れて來ることは甚だ難しいことである。

先づ能く法を說く人が世に現はれること。次にたとへ能く法を說く人が現はれても能く法を聞く人が出て、それを受持すること。此の二ッの人が同時に世に出て來ると言ふことは甚だ稀なことである。

故に諸の比丘よ。汝等は如何に法を說くべきか、又如何に法を聞くべきかを學べ。(增一阿含經、勸請品取意)

此の經文から考へて見ると、我々が或る問題に直面する時、第二の方法に寄らんとするならば、少くも二種の難關が横つて居ることを知るのである。

第一　自分の身も心も打ち任す程の眞實の師匠を得ると言ふこと。

第二『俺は賢い』と言ふ我執を根本から打ち壞して謙虛な愚者に立ち返ること。

源義家が大江匡房に兵法を聞いたと言ふ有名な話は、隨分小さい時分に聞いたことだが、今から思へば、實に意味の深い敎訓であつた。『俺は賢い』との我執は誰人にも幾分あることであらう。併し私には殊にそれが深かつたのだ。そのためにどれだけ良師を捕へる機會を失つたことが分らない。

二度までの謝絕を構はず、三度目に自ら雪を冒して諸葛孔明の草廬を訪れた劉備の、偉大さを思ふ。又近江聖人を慕ふの餘り夜中一睡もせずして其の戸口

に立ち續けた熊澤蕃山の熱情を思ふ。これ等の話を靜かに考へて見ると、師が弟子を引きつける力の大なりしか、又は弟子が師を慕ふの力大なりしか。どつちか分らぬ樣になつて來る。

親鸞聖人の傳を開いて見ても亦此の消息に觸れることが出來るのである。

『建任第一の曆春の頃(聖人二十九歳)隱遁のこゝろざしにひかれて源空聖人の吉水の禪坊に尋ねまゐり給ひき。是れ即ち世くだり人つたなくして難行の小路迷ひ易きによりて易行の大道に赴かんとなり。眞宗經隆の大祖聖人ことに宗の淵源をつくし敎の理致をきはめてこれを述べたまふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し飽くまで凡夫直入の眞心を決定しまし〳〵けり。』

(御傳鈔上第二段)

此の敎行を何でもないことの樣に思つてはならない。此れだけのことが成立つためには師と弟子の各々の胸の內にどれだけ長い間、或るものが動きつゞけて居たか計り知ることが出來ぬ程である。『遇々行信を獲ば遠く宿緣を慶べ』てふ親鸞聖人の御述懷は其處に發せられたのである。舍衛國說法の釋尊は日本の地に於けるこの奇しき緣熟にどれだけ喜ばれることであらうか。誠に誠に、眞に法を求むる弟子が眞に法を說く師に遇ひ得し事實を見れば奇蹟とさへ思へるではないか。

私は此の稿を書きつゝ思ふ。現代に能說法の人ありや。將又能聞法の人ありやと。或人は答ふるであらう。

現代はその何れをも兼ね備ふ。汝先づ各宗派の布敎使名簿を見よ。その錚

〻たる人物の顔觸れに一驚するであらう。次に全國數萬の寺院に集まりて法を聞く人の數を一年間延人員にして計上せば、その多きに再び驚きの眼を見張るであらう。此の二ッの事實を見るならば決して能說法の人にも能聞法の人にも缺げざるを知るのである。』と

又或る人は答ふるであらう。

『否々、現代は能說、能聞二ッながら其の人を見ないのである。試みに說敎師と言はるゝ人の說法の態度の不眞面目さを見よ。又それを聞く同行の心理狀態を詳に視察せよ。然らばその何れもが釋尊の仰せらるゝ能說者、能聞者に該當せざるに汝は深い失望を覺ゆるであらう。』と

私は其の何れもに對して肯けるである。

又同時に此兩者に否と答へ得るのである。

時代は動いて行く。小止なく動いて行くと共に眞理も時代相に適合しつゝ流れて行く。若し眞理が時代相を取り入れることを拒むならば我々はどれだけか淋しさを覺ゆるに違ない。

思ふに人類の歷史何れの時代も暗黑であつた然し暗黑の內にも常に眞理はその時代相の上に自ら姿を現はし續けてゐた。無窮の光明は斷え間なく闇黑の世を縱橫に流れ通して居た。先覺者は闇ばかりを眺めて徒らに泣いてはゐなかつた。闇と光の交叉點に立てる彼等は常に世人に醒めよと叫んだ。眞に暗黑の恐しさに戰慄する人のみ始めて、其處に流るゝ光明の妙なる風光に接し得るのである。

彼等は能聞法の人である。同時に語らずと雖も能說法の人である。

無明長夜の燈炬なり
智眼暗しと悲しむな
生死大海の船筏なり
罪障重しと嘆かざん

聲は何處より響き來るか。光は何處より流れ來るか。詮索は無用だ。進まふ進まふ。

泣くことも止めよう。傲ぶることも止めよう。聞法に生くるの道は餘りに明らかに示されてあるではないか。（一四、一〇、三〇）

正信偈の話（二十一）

第六章　天親菩薩論

第一節　造

第二節　他力の一心

第三節　利益

一、現生の利益

二、往相の證果

（本文）得至蓮華藏世界（請方）即證眞如法性身

（字義）蓮華藏世界に至ることを得れば即ち眞如法性の身を證せしむ

『蓮華藏世界』　華は美しいもの〳〵象徴である。蓮華の泥にそまぬが如く淨土の全ての煩惱罪濁をはなれたるを表はすために蓮華といひ、種々なる無量の德を藏してゐるが故に蓮華藏といふ。蓮華藏世界とは安養淨土のことである

『即證』　淨土に往生すれば、それと同時に成佛することである。

『眞如法性身』　眞如とは、眞實如常といふ義で、成佛の證果である。一切迷妄なく常住不變であること、法性も眞如も同一義である。眞如法性身とは、佛果涅槃の證を顯はす身となることである。

（講　話）

□往生卽成佛

現生の利益が大會衆の數に入つて、不退必定の菩薩たることを擧げられましたが、次ぎは、當來成佛の利益をあげられてあります

佛徒の唯一の理想は成佛であります。暗い現實にふれて悲泣した我は其處に唯一絶對の勅命にふれて、信心歡喜の衆生たり得たのであります。一如法界の大功德たる南無阿彌陀佛を廻向せられたる我等は其のまゝ彼尊に召されつゝある往相の往生人でありました。往生人は彼の世に至つてあらためて修業するのでもなく逸樂にふけるのでもなく、往生はたゞちに成佛であります。成佛することは私どもの久遠の大理想であります。成佛するとは、眞如法性身を證することであります。無量壽、無量光たる阿彌陀佛と同体一味の證果を得させて頂くことであります。鮮かな信の体驗者の往生はそれがすぐ成佛であるとは、最高の神秘の開顯であります。

□蓮華藏世界

私どもの魂の故郷たる阿彌陀如來の世界をば、種々なる名をもつて表はされてあります。蓮華藏世界といふのもその一つであります。蓮華藏世界とは單に彌陀淨土の名ではなかつたので華嚴經等に說かれたものであります。けれども大經上卷の終には『又衆寶蓮華周二滿世界一』とあります。ひいて彌陀淨土の名をも蓮華藏世界と申すのであります。

唯信鈔文意に、『極樂无樂涅槃界といふは、極樂とまふすは、かの安養淨土なり。よろづのたのしみつねにして、くるしみまじはらざるなり。かのくにをば安養といへり。曇鸞和尙は、ほめたてまつりて安養とまふすとのたまへり。また論には蓮華藏世界ともいへり。無爲ともいへり。涅槃界といふは、無明のまどひをひるがへして無上覺をさとるなり。界はさかひといふ。さとりをひらくさかひなりとしるべし、涅槃とまふすに、その名無量なり。くはしくまふすにあたはず。おろ〳〵その名をあらはすべし。涅槃をば滅度といふ、無爲といふ安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ一如といふ、佛性といふ』とあります。

愛欲の世界に苦を苦とも知らず、どうすることも出來ぬ凡夫の現實を抱いて暮してゐる私どもにも、如來は涅槃の唯一なる眞因たる信心を廻向されたのであります。さうして、名號を体得せるものが、やがて、最上の佛果たる涅槃の證果を與へられることを、天親菩薩は『蓮華藏世界に入ることを得』と申されました

事實の權威

住岡狂風

いづれが勝か

見るかげもない荒家に六十をも過きた老婆が住んでゐる、其顏の輝き、其眼は常に微笑んでゐる、彼女の口からは常に念佛稱名の聲が聞える、彼女は人に生れたことを感謝し、不幸であつた人生の後半生すら感謝法悅の中に融してゐ

其隣に廣大な邸宅を構へた金持がある、家庭の內には、不平が斷ゐない、奧

樣のお口からさへ、呪ひのお言葉を聞くことがある。世には、食ふに餘り費すには十分すぎても猶、不平を言ふ人がある。主人が村の議員になつた位が心の毒で、一切人を目下に見て、聞法、修養も心掛けたことなく、自稱物識りで、可惜五十年を、天狗のまゝで終る。

彼の信條

彼の前には一點の光が見ゐる。

彼の前には過古の聖者偉人の足跡が見ゐる。彼はそれを見つめる。

世人は彼を無智だと笑つた。けれども彼は雄々しくも出發した。

彼の周圍の人々は、狂者だと云つた。それでも、それが耳に入らぬ者の如く走つた。

彼には時に其日に食ふものさへない日があつた。けれども彼は立とまらなかつた。

或時は多數の民衆が彼の後を追ふて來た。さうして彼を拜んだ。しかし間もない內にそれらの民衆は手に〳〵石礫をつかんで彼の全身を目がけてなげつけた。しかし彼は見向きもしなかつた。彼は彼の光を追ふて走つたのだ。

或時は彼の財布の中の金をとつて逃げたものがあつた。しかし彼はそれを追ふよりは道を走ることが忙しかつた。

彼は三年間も夏服を着て冬を通したことがあつた。彼は彼の心中から根强い惡魔が彼を誘惑しかけたけれど、そんな時には不思議なる力が彼をはげました彼は依然として彼の道を急いだ。

彼を追ふて走つた若者たちの中には、彼よりも更に勝れたる權威者が生れてゐる。彼はそれを見ることを無上の喜びとしてゐる。

彼の信條は、『念願は人格を決定す』

『繼續は力なり』

といふことである。彼は常に內に或る力强い聲を聞かうとしてゐる。

眞の力

人は、馬鹿だと云はれたから馬鹿になるのではない。賢いと云はれたから、賢くなるのではない。民衆が馬鹿だとか、賢いとか云つてゐる間に、自分自身の道を精進した者だけが賢くなる。無責任な民衆たちは、他人を見て馬鹿だとか賢いとか云つてゐる間にほんとの馬鹿でもはるのが多い。人は馬鹿だと云

はれたり、賢いと褒められたりするために生れて來たのではない。

無責任な人の口はどうでもいゝ。事實だけが權威である。

民衆が馬鹿だといふのには、氣をかけなくてもいゝ。それよりも自己か馬鹿であることに氣附かねばならぬ。

民衆がわい〳〵褒めたり、騒いだりするのは當になるものではない。眞の力となるものは七轉八起きする心の力のみである。

人格

九州の東陽圓成和上が大往生をとげられたのは本年の二月十八日であつた。師の死後、誰かの弔詞に『關西の明星』といふ讃辭があつた。眞に其信仰、其學德共に一世を風靡して關西の明星であつた。師のお宵てを蒙つたことのある人たちは眞の親のやうに慕つてゐる。人格の人であり、眞愛の人であつた。或處には、和上と同じ司敎の學位を持つた僧侶の方がある。其方が高座に上れば話の半分は人の惡口でおはる。自慢でおはる。其話を聞いた人たちの大部分が檢附に名をよぶ者は少い。學位でもいかぬ。辯舌でもいかない。人格の光こそ權威である。

權威者を求む

いづれの社會にも、如何なる場所にも、堂々、わが道を歩ゆむ權威者がほしい。

なまけた青年團の中から一人の求道者が出る。目覺めない輩たちが口々に罵る。八裂きにされても、求道の旅を續ける權威者がほしい。

同級生が集つて悪い相談がまとまりかける。頑として不正に組せぬ權威者がほしい。

自信をもつて歩む者には言譯がいらぬ。正しいと信じたことの前には他人をはゞかる躊躇がいらぬ。言葉でものを云はせず。事實でもの云はせる權威者がほしい。

つけたものははげる。借りたものは返さねばならぬ。附けたものも、借りたものも、權威ではない。我が內に獲得したものゝみが、光であり、權威である。

獲得せんと思ふ者は求めよ。
精進する者のみやがて權威者となる。

編輯室

各地の諸法兄姉様御[illegible]りなく御念佛御相續の事とお察し致します。秋は既う終りを告げ、寒い冬がまいります。汽車や自動車で飛び廻りながら窓外の秋景色を眺めますと、凡てのものに自己の悲しい心魂が見出される感に打たれ、萬物の底から涙の泉がふき出して、嗚咽くやうな言ひ知れない寂しさをそゝられて、はてもわからない虛空の端迄も漂はされて行きそうな氣持が味はれます。その寂しさの中に深い涙を一杯たゝへて永遠を追求せんとする久遠の生命が、かすかに頭をもたげようとしてゐる樣が自然から私共の心へ、我が心から自然へと大地の上を彷徨ふて深い思ひに浸ることがあります。こうした樣な心情で大悲の御佛の慈悲の涙を生命の糧ささして戴いて、まめで所々に講演の旅をつゞけさして貰つて居ります。十月二十八日に佐々繁白道樣と同道で、私の郷里へ遊びに歸りました。毎夜數名の人が來られ座談會見た樣でした。

◆講演の旅

□福山市寺町最善寺佛教講演會、主催福山市精神文化協會、自十一月二日至三日、講題「絶對他力の大道」、光明團の講演會は當市では今回が皮切でしたが、各種の聽衆を網羅して大本堂へ一杯の盛況人、福山市未曾有の大會。

□福山市第二回精神文化講習會、於市役所樓上、主催同市精神文化協會、自十一月四日至六日、講題「淨土莊嚴の喜悅」、第一日一切衆生悉有佛性、第

二日生命の深み、第三日淨土莊嚴の本願讃歎敬行信證の信の卷に出てゐる涅槃經の一部。毎夜凡そ百名許りの會員が御集ひで狂風先生の三時間に渉る講演を誠に眞劍にお聽きでした。會員は主として知識階級の紳士淑女青年婦女の方で、可なり成功裡に終了しました。

十一月七日夜には松岡婦人科醫院の二階で信仰座談會

□福山市薬陽婦人會講話會、八日午後中國新聞福山支局長濱本鶴實先生の御求めに依つて中井外科醫院の二階を會場にして「眞の自由」の題目で一場の講話をされました。夕方頃白道君は郷里の寺の住職披露法會の餘興準備の爲歸郷の途に上る。同夜も信仰座談會で薬陽婦人會の方も澤山見え、しつくりした談合でした。

□尾道市長江町最善寺佛教講演會。主催福山市精神文化協會、後援尾道市佛教濟世軍支部、自十一月九日至十一日、毎日福山市の中井無聲法兄氏宅から通勤。十幾名が一行となつて列車で堂々と乘込んで大々的に盛團しました。特に毎晩濟世軍人の方々の御援助で、講演の始まる迄團旗を振りかざし團歌を高唱し、野外傳道にも努力しました。濟世軍の方の御熱心な御助力で宣傳も行屆いて非常に盛會でした。厚く濟世軍の方々に感謝の意を表します。最後の夜には講演終了後茶話會にお招きにあづかり、その上驛迄御見送り下さいました事には恐縮いたしました。

□府中町松岡樣宅講演及信仰座談會。十一月十二日夜、當夜は私が風邪氣で喉を痛めてゐましたので留守番を務め、狂風先生が御一人で行かれ悪人正機の御話で多くの人々が感動された由。十三日午後私は一夜宿りに歸郷すべく出立した。

□廣島市濟世軍吉島分隊報恩講講演會、自十一月十四日晩至十五日夜。狂風師は福山市中井無聲法兄樣宅から半ケ月振りに御歸廣。前夜も三四時頃迄座談をなされ、御疲れの所を私が咽喉が悪くて殆んど聲が出ませんので、御一人で御講演下さつた。十五日の登壇はのどが少し恢復した樣でしたから話さしていたゞきました。十四日晩から私の兄一乘及び姉、池本綾子法姉等は賀茂郡から遠路を經て道を求めに來て、十五日の夕方の列車で歸宅、又安藝郡の坂村の御同行が澤山宿りがけでの聞法の態度の如きは誠に感涙にむせばざるを得ませんでした。

□山縣郡加計町土居觀安寺佛教講演會、主催川北青年團川北婦女會。自十一月十六日夕至十九日夜十六日夕方狂風先生と淋しく講師室にゐますと九月の末に御邪魔さして戴いたなつかしい戸河内村松原の河野藤九郎先生の奥樣が突然這入つて來られてほんとに嬉しう感じました。

參詣者はいよ〳〵增して會場にあふれ出る位。二里三里の路を踏んで集る同行の熱心さ、猪山の方々が夜十二時頃出發して闇の中を三里の道を御歸る姿を見送らして貰つて悪はず合掌いたしました

□加計町田之原淨追邪會講演會、於齋藤樣宅、二十日、狂風師は登壇後安野村へ向けて立たれ同夜

は私一人で話さしていたゞきました。齊藤様の宅は昨年十二月初旬に狂風師を初めて加計町に參りました時、一夜御厄介になつた御内なので親しい心持で皆様と倉はして頂けました。

□山縣郡安野村津都見寺田一三氏亡御尊父母様第拾七回忌記念佛教講演會、講題「二河白道」自十一月二十日夕至廿三日夕、廿一日が其忌日に正當する日で御親類の方々が多人數御列席の上丁寧な佛事が營まれました。私は七月に亡父の一週忌に會つた時の事を追想して感慨無量でした。話を濟まして室に居ますと當家の御主人の弟さんの寺田勝男君が這入つて來られ、縣中を一緒に卒業して久し振りに面會したので中學校の四方山の話をしました。寺田様の御宅は同窓生の友人の内ですからなんさなく大へん懐しい氣がします。不思議な因緣と味はずにはゐられません。加計町の寺田勝男君を小學校から中學校を卒業する迄育て上げられた叔母様に御會ひして、色々なお話を承り靜かな心地で有益な時を過さして頂きました。

毎席寺田一三法兄様が圓嶽を合唱させて下さいましたので嬉しう存じました。

二十三日には、朝から加計町水谷の平田様といふ婦人の眞剣な求法の人が見え、後からその御主人やその他の人々參られました。

やはり加計町の佐々木様、新宅様、齊藤様、の三法兄も三里餘りの所を忍んで、道を求めて追ひかけて來られました。

こんな風な有様で中々盛大でした。

津都見は背年の人々が都合よく目覺めてゐられるので力強く感じました。

二十四日午後二時すぎ、涙の別れを告げて安佐郡小河内村小峠の中野源市様宅へ向つて自動車に揺乘しました

中野様へは前日花岡悲風先生が寺田様へ一寸來られ、例の平岡北次様といふ有難いお爺さまが住岡先生に會ひ度いと言つて居られたと話されましたので、平岡のお爺様に會ひに、立寄らして貰ひました。

私は中野様へは、此の度で三回お邪魔に上りました。東都の大震災で亡くなられた中野千代香法姉様の御生家でもあり、平岡の爺さまが近くに居られますので、緣を深く結ばして戴くのでございませう。

平岡のお爺さまはいつも「南無阿彌陀佛〳〵、有難い忽体ない」と大聲で稱名なされ、ほんとに念佛で心身全体が躍動してゐられます。

新宅百登、齊藤作一、両法兄は安野村から更に中野様迄尋ねて來られました。

二十五日午後五時發自動車で八時頃本部へ安着いたしました。

何卒皆様、御健やかに御念佛もろともに、新年をお迎への程念じて失禮いたします。合掌。

一九二五・一一・三〇

本部にて　愚　狂

十二月講演の豫定

□一　日——四　日　山縣郡川迫村川戸　主催青年團
□五　日——七　日　三原町　主催醫師森忠雄氏某寺
□八　日——十　日　忠海町　主催婦人會　會場明泉寺
□十　二日　佐伯郡津田村婦人會總會
□十　三日——十八日　同　村西福寺永代經法座
□十　九日——二十日　廣島高等工業學校講堂（未定）
□二十一日——二十四日　安佐郡飯室村（未定）
□二十五日——二十九日　熊野町支部
□一月二日——五　日　賀茂郡白市發國寺　佛教青年會
□六　日——七　日　尾道市警察署樓上　主催求道會

本誌定價

一冊　金拾錢
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

申込

全て前金にて半ヶ年分以上御申込の時は送金下さい。送金は振替を使つて下さい。

前金切れ

前金ぎれの時は「前金切れ」の印を押して御注意致します。二三回しても送金のない時は送本をやめます。特別の事情の方は其旨を云つて下さい。

大正十四年十二月十日印刷
大正十四年十二月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　廣島市餌碕町四十八番地　石佛二郎
印刷所　石佛印刷所

廣島市南竹屋町五四一番地
大日本眞宗　發行所　光明團本部
振替貯金口座弓關貳參〇八番